



連載  
第516回

## 「生」を再定義する「ア」の人を見よ！

撮影／弦巻勝

# 人間力

ん、仕事はいつもやれる限りのこと  
をやつてきているんですが、今作  
は「もっとできることはないか？」  
と自問自答してから臨みました。

なにしろ、奥田家も柄本家も一筋  
縄じやいかない、うるさ型。ばかり  
(笑)。しかも、佑とは多いときには  
週に3度は会う仲なんですよ。だか  
ら、バシッと準備して現場に立たな  
いと、親族にも、世間にも笑われる  
ぞ、という思いでしたね。

そうやって撮影を終え、試写を観

てみると、とにかく、登場人物の一  
人一人が素晴らしい。原作の

長尾和宏医師をモチーフにした役を自  
分が演じているという誇らしさ、そ  
して彼に影響を受けていく主人公の  
姿に、非常に感動したんです。

余韻は消えず、その日の酒はめち  
やくちやおいしかった。そして、書  
き込みだらけの台本を引つ張り出し  
てきて、それを眺めながら、生きる  
ということ、死ぬということについて、考  
えたんです。

僕が死ぬときのことも考えました。  
2つの希望を家族に伝えてあります。  
まず、戒名は自分で決める。

そして、棺桶は無垢の桐でできた  
リーズナブルなものにして、それによ  
娘と孫たちに絵を描いてほしい、と。  
この世におさらばを告げるときは  
……できることなら、「よく普通の感  
じで」「ありがとう。グッバイ、また  
な」とあいさつをして逝きたいなあ。  
僕は死ぬ年齢をもともと98歳に設  
定していました。でも、コロナ禍が

「生きる」ということは「長い自殺」である——。つい最近まで、僕はそんなふうに思っていました。飲みたいだけ酒を飲み、健康のことをなど省みず、やりたい放題にやる。そうやって、少しずつ、毒を体にため込んで死に向かうという生き方に憧れを持っていたし、だからこそ、奥田瑛二でいられるんだとも自負していました。

我々、団塊の世代は、  
思う存分やつてきたわけだから、  
みつともなくあがいちゃいかんと思つ。  
潔くしないと、時代に申し訳ない。

# 奥田瑛

(俳優／映画監督)

おくだ・えいじ  
1950年3月18日生まれ。愛知県出身。1979年「もつとしなやかに」で映画主演デビュー。主な出演作として、映画『海と毒薬』、『千利休』、『本覺坊道文』、『棒の哀しみ』、ドラマ『金曜日の妻たちへIII』、『恋におちて』、『男女7人夏物語』(ともにTBS系)などがある。映画監督として『少女』、『長い散歩』など5作品を発表している。



あつたので3年延長して、101歳になりました。今、70歳ですから、まさにそう言えるようには、あと31年生きたいと思います。東京オリンピックも、バブルも知っている。仕事をバリバリやり、酒を飲み、思う存分やってきたわけだから、みっともないあがいちゃいかんと思うんです。我々、団塊世代を見て大人になり、因子を受け継いでくれているから、パワーがあります。彼らはコロナ禍でもおじけづくことなく、エネルギーを失うこともなく、でも慎重に、前へと進んでいる。あいつらが将来を支えていくと思うと心強いです。元気が出ます。

健康面については、ありがたいことに妻と娘たちが口うるさく言ってくれます。水を1日2㍑飲め、とかね(笑)。最初は「そんなに飲めるか!」って抗っていたんだけど、だんだん慣れてきて、今では「今日はもう1㍑以上飲んだよ」なんて報告するようになつた。だから家族には「今後もしつこく言い続けてくれつて頼んであります(笑)。

そうやつて生き続けて、いつか佑の父親である柄本明さんと、ジジイの闘い、みたいな共演をしてみたい、と思っています。